

安井息軒の生涯

— 安井息軒研究 (二) —

目次

序説 安井息軒と中村敬宇 (前号)

第一章 安井息軒の生涯

はじめに

(一) 父の膝下で学ぶ

(二) 江戸で師友に交わる

(三) 激動の時代を生き抜く (以上本号)

第二章 安井息軒の著作 (以下続く)

第一章 安井息軒の生涯

はじめに

序説「安井息軒と中村敬宇」で述べたように、東洋の社会科学が抱えていた最大の問題は、「法の支配」という思想がなかったとい

古賀 勝次郎

うことである。しかし、「法の支配」の思想が東洋には全くなかったかというところではない。中国の古典である『管子』の中に、「法の支配」の思想が看取できる。『管子』は、中国の最も古い思想家で政治家であった管仲の事跡を慕う弟子たちや後世の人々が書き継いで成ったもので、戦国時代末期頃の作といわれる。さて、近代中国の哲学者・馮友蘭はその『中国哲学史』の中で、『管子』の中に、「法の支配」の理念が表明されていたことを明瞭に指摘している。そしてF・A・ハイエクは、著書『自由の条件』(The Constitution of Liberty, 1960)の注の中で、馮友蘭の議論を引用しながら、こう言っている。

「一つの偉大な非ヨーロッパ文明、すなわち中国文明は、ギリシヤとほぼ同じ時期にヨーロッパ文明の法概念と驚くほど類似したものを発展させていたようだ……。馮友蘭の『中国哲学史』(上

History of Chinese Philosophy, 1937) によると次の通りである。『紀元前七世紀から三世紀の間の』時代の大きな政治傾向は封建支配から絶対的権力をもっている支配者による統治への動きであった。すなわち、慣習的道德および個人による統治から法による統治への動きであった。』同著者は管仲の著作『管子』からその証拠を引いている。しかし、その著作はたぶん紀元前三世紀に成ったものである。『国家が法律によって支配されるときには、物事は簡単に定まった進路にしたがってなされるであろう。……もし法律が一定していなければ、国家の維持者にとって不幸となるだろう。……支配者と大臣、優位者と下位者、貴人と卑人、すべての者が法律に従うとき、偉大なよき政府を持っていると呼ばれる。』しかし、同著者は、それは『一つの理想であって、まだ中国では実際達成されたことはない』とつけ加えている。¹⁾

何故、中国、広く東洋においては、「法の支配」の思想は発展しなかったのだろうか。その理由としては種々考えられるけれども、最も大きなのは、穂積陳重がいうように、韓非以降、儒家と法家とが激しく対立し合ってきたからである。即ち、法家は儒家の倫理に基づく徳治・礼治主義を非現実的なものとして批判してきたし、儒家も倫理を軽視した法家思想を功利主義だとして非難し続けてきた。もともと、中国や日本の思想家の中にも、儒家思想と法家思想とを統合しようと試みた者もいないではなかった。だが、儒家思想と法家思想とを統合することは極めて難しかった。それは、思想的・理論的な問題の外に、『管子』が、清の応宝時もうのように、

「*抵牾譎諛之書*」であって、そのテキスト自体を正確に読むことが困難であったという事情があったからである。

それ故、『管子』について論ずるには、先ず何より、そのテキスト・クリティークを行わねばならなかった。息軒は、そのテキスト・クリティークを先ず行い、テキストをかなりの程度正確に読めるようにした上で、自らの解釈を下し、『管子』を論じたのであった。もつともそこには幸運もあつた。というのは、息軒より少し前に、猪飼敬所が『管子補正』を著して、『管子』が従来より正確に読めるようになっていたからである。しかしそれでもなお、読めない箇所が多く残つた。その大部分を読めるようにしたのが息軒だったのであり、その上に立って、息軒は『管子』を論じたのである。それは丁度、本居宣長が、『古事記』のテキスト・クリティークを行ひ、『古事記』を読めるようにした上で、『古事記』を論じたのと似ている。それはともかく、敬所の『管子補正』や息軒の『管子纂詁』が、郭沫若らの『管子集校』や黎翔鳳の『管子校注』などに多く引かれていることに現われているように、今日の中国においても高い評価を得ているのは、敬所や息軒のテキスト・クリティークが極めて正確だったからである。そして、敬所が、テキスト・クリティークに徹して、『管子』については余り語らなかつたのに対し、息軒は、『管子』について語つたばかりでなく、『管子』を儒学と関わらしめて論じたのである。ここにおいて、息軒は、儒学と『管子』との連続性、重合性を認め、儒家思想と法家思想との統合を成したのであつた。これは、それまで、儒者の誰一人として成し得な

かったことであつて、正しくここに、儒学史上における息軒の最も偉大な貢献があつたのである。幕末・明治初期に、息軒がともかく、儒家思想と法家思想とを統合しておいたことが、その後の西洋社会科学の導入を比較的スムーズにした原因の一つとなつたことは容易に理解できる。

本論文の目的は、安井息軒がいかにして儒家思想と法家思想とを統合したのか、そしてそれがいかに継承されていったかを明らかにすることにある。だがそれには先ず、息軒の生涯と著作について見しておく必要がある。

(一) 父の膝下で学ぶ

安井息軒は、父朝完、母楚也の二男として、寛政十一（一七九九）年一月一日、飲肥藩清武郷中野に生まれた。父の朝完は、明和四（一七六七）年の生まれ、諱は完、字は子全、滄洲と号した。兄の朝淳は寛政八年に生まれ、息軒より三歳年上であつた。また、息軒には八歳下の妹美和がいた。²⁾

息軒、諱は衡、幼名は順作、字は仲平、初め足軒と号し、後に息軒と改めた。息軒は『礼記』の「学記篇」の「君子之干学也、蔵焉修焉、息焉、遊焉。」から出ている。また、半九陳人、葵心子とも号した。このうち前者は、『戦国策』の「行百里者、半於九十里、此言末路之難。」から出ている。葵心は、向日葵の花が日光に向かつているさま——それは、君子あるいは最上の徳を仰ぎ慕うのに似ている——、ということだが、また、郷里日向（日向ひまわり）に向かう）に

かけたのだろう。つまり、葵心子とは、向日葵のような人間、日向の人間ということであろう。

息軒の父滄洲は、幼にして俊敏、学問が好きで、叔父日高源助について句読を学んだ。余りに学問に熱中するので、滄洲の母は、数年間、夜の勉強を禁じたという。二十代後半頃、近所の子弟を集めて教授を始めた。後に息軒は、父の学問観について、「生於斯世。当為斯世之用。然世不我知。今日所為。独有育人材耳。」（「太平山表」）であつたといっている。³⁾ 文化元（一八〇四）年、三十八歳の時、藩主に従つて江戸に行く。江戸では勤めの傍ら、古屋昔陽について学ぶ。⁴⁾ 翌年帰途、京都に立寄り皆川淇園の教を受けた。古屋昔陽は熊本時習館の訓導愛日の弟である。家学の徂徠学を受けた後、江戸に出て、日本橋で私塾を開いた。昔陽の学は古注学で、六朝以後の経解は取るに足りないものだとこれを却けた。皆川淇園も古注学者で、所謂「開物学」を唱えたことで知られている。それは、声音の中に言葉の意義が存し、言葉はまた書物で書物はまた名であるから、「因名以開其物」というものであつた。尚、国学者の富士谷成章は、淇園の弟である。このように、古屋昔陽や皆川淇園に学んだことから窺えるように、滄洲は、朱子学には批判的で、古学、古文辞学あるいは古注学を信奉していたのである。そのため、息軒は年少より、父から、伊藤仁斎や荻生徂徠を教えられ、朱子学を取ることはなかつた。

滄洲はもちろん何よりも儒者であつたが、また俳人でもあつた。当時清武には、太田治水や均下亭巴国といった俳人がいて、俳句が

盛んだったので、滄洲もそうした影響を受けたのであろう。そして息軒も父の影響で俳句も作っている。滄洲には、『尚白集』をはじめ『卯の花』、『温泉記』など多くの紀行文があるが、それらには何れも漢詩と共に俳句が多く載せられている。例えば、文化十五年四月の紀行文『卯の花』の冒頭のところを摘記するところがある。文中の南陽は息軒の号である。

「ことし文化十あまり五つと云ふ年卯月中の一日、延陵までの佳境騷人を尋ねんと、二男南陽を携出るに、雨のそぼ降れば、晴ての後の遊びこそいと興あるへけれど、人々とかめける袖ふりはなし

て、
適の旅衣なり古あわせ 滄洲

卯の花をふり顧る首途かな 南陽」

しかし、息軒が漢文の他に習ったのは、俳句だけでなく、和歌も学び、和文も作った。それは百芸に通じたいと思っていたからである。だが、十八・九歳になると、息軒は、自分の才能を伸ばし、志を述べるには漢文でなければならぬと考え、漢籍の研究に専心するようになった。

そこで息軒は、文政三（一八二〇）年、二十二歳の時、大阪に行き、その年の十月、篠崎小竹の私塾梅花書屋に入った。小竹の門人帳には、翌四年一月十五日の条に、安井順作の名が記されている。小竹、名は彌、字は承彌、小竹は号である。父は豊後の人加藤吉翁、大阪で医を営んでいた。小竹はその第二子である。古文辞学派の篠崎三島に学び、その養子となったが、その後、江戸に行つて、

父の友人・尾藤二洲の講論を聞いたり、古賀精里に会つたりして、朱子学に傾倒するようになった。小竹ははじめ余り気にとめなかつたが、息軒と語るに及んでその学識の広く深いのに驚歎し、詩を賦して贈った。その中に、「一言欲下堂」の句が見られた。もつとも、息軒は小竹の学問に心服して入塾したのではなく、藏書家として知られていた小竹から書物を借りるためであった。息軒の弟子谷干城は『隈山論謀録』の中で、息軒の話として、こう伝えている。「本国にありては、書籍に乏敷故に、上阪せし事なれば、別に師家を取る念もなかりしが、当時、藏書家と聞へたる篠崎小竹は、其の門に入らねば、書物を貸さぬ由に付、同氏の門に塾を取り、書籍を借覽せり。」

従つて、小竹塾での息軒の勉学は、殆ど独学といつてよいものであった。息軒はいま一、二年在塾する予定だったが、兄朝淳が亡つたので、帰省することになった。小竹は息軒の帰郷するに際し、詩を賦して贈った。

送安井仲平帰省

受而莫助兩年間。聊以藏書供縦覽。

秦漢文章齋在腹。青衿応勝錦衣看。

息軒の兄朝淳は清溪と号した。清溪は幼少より才能において人に勝れていたが、とかく病気がちで、文政四年五月、二十六歳で死去。後に息軒は、『清溪遺稿』に序してこう誌している。「君少学於家庭、岐嶷夙成、其学长於経綸、嘗見民俗凋弊、慨然有匡救之志、頭達之士、往往知之、而体氣羸弱、力不蔽志、歳無不病之月、月無

不嘔之日、如是者四年、齋志以没。⁸⁾

清武に戻った息軒は、父を助けて郷土の子弟教育に従っていたが、学問への意欲ますます募り、文政七年、二十六歳の時、江戸に行き昌平黌に入ることになった。しかし当時、昌平黌に入るには、林家もしくは同黌儒官の門人でなければならなかったため、息軒は、古賀侗庵の門に入った。侗庵の門に入ったのは、同郷の先輩落合双石が古賀一門と深い関係にあったからだといわれている。周知のように、古賀侗庵は寛政の三博士の一人古賀精里の三男である。朱子学を主としていたが、それにこだわらず、諸子百家に精通し、洋学に対しても寛大であった。また、栗本鋤雲が「博洽強記にして著述浩漭一身半に及ぶ」といつているように、侗庵は膨大な著作を残している。更に、蔵書家としても有名で、「蔵本一万余卷」あったといわれる。しかし、侗庵と息軒がどういう関係にあったのかについては殆ど知られていない。ただ、古賀精里の長男穀堂の子佐賀藩儒官だった素堂とは深く交っていたようで、「送古賀元載序」、「題西帰南泛再東合稿」といった文章を書いている。前者の末尾にはこうある。「元載以傑出之才。事英明之君。而海防之任。子国専之。是亦一可為之時也。子帰。深謀長慮。謹勿失其機哉。」⁹⁾

また略々同じ時に、息軒の生涯の友となる塩谷宥陰も昌平黌に入っている。江戸愛宕山の下で生まれたので、宥陰という号がつけられた。名は世弘、字は毅侯、通称甲蔵、息軒より十歳年下であった。宥陰は、「足軒記」の中で、その頃の息軒の様子を以下のように書いている。「余年十六。遊昌平学舎。時安井仲平新来自日州。

先余一日入院。朝夕而觀其所居。其服則沢乎垢。其食則淡乎薄。而其色則充然揚矣。」¹⁰⁾息軒がいかに身なりにかまわず、専心学問に励んでいたかが窺われる。また息軒は、身長極めて低く、男振りもよくなかったといわれる。宥陰の「送安井仲平東游序」にこうある。¹¹⁾

「仲平。飢肥人。眇然小文夫。状寝陋甚。」宥陰も男振りはよくなかったらしいが、背の低い息軒と、背が高く堂々としていた宥陰との奇異なコントラストは、しばしば周囲の笑を誘ったといわれる。しかし、宥陰は、息軒の広くて深い学問と高い見識には、常に畏敬の念を抱いていた。上の文に続いてこうある。「矻矻不少懈。読書眼透紙背。識慮高卓。議論出人意表。予畏事之。」宥陰の他、息軒が昌平黌で交った者には、佐田修平、牧園進士、井上彦一などがいる。佐田と井上は後に久留米藩儒に、牧園は柳川藩儒に、それぞれなっている。

息軒が古賀侗庵と余り親しく交らなかったのは、恐らく学問的立場が違っていただけであろう。息軒は、父の教えもあって、既に、古注学、考証学に傾倒していた。後はそれをより深く堅固にするこゝとだけであった。当時、江戸で古注学者、考証学者として全国にその名を知られていたのは、松崎慊堂である。初めの名は密、後に復、字は退蔵、後に明復、慊堂は号である。羽沢山人、羽沢老農、五経先生といった号も用いている。しかし、慊堂は最初から考証学に立っていたのではない。初めは、朱子学を信奉していたのである。後、狩谷掖斎や市野迷庵の影響を受け、考証学に転じたのであった。文政九年の五月、息軒は慊堂の弟子となり、生涯師として心

服し敬った。宥陰の入門はその二年後である。

また、文政九年、息軒は江戸藩邸勤番を命ぜられ、藩主祐相の侍読を兼ねることになり、翌十年、藩主に従って帰国した。帰国後、川添佐代と結婚。佐代は文化九（一八一二）年生まれで、息軒より十四歳下であった。息軒と佐代との間には、四女二男があった。長女須磨子、二女美保子、三女登梅、四女歌子、長男朝隆、二男敏雄である。佐代夫人は美貌で貞順な人だったらしい。森鷗外の「安井夫人」によく描かれている。

実は、息軒が帰郷する一年前頃から、清武に学問所創設の議が起り、同年九月に、藩に願い許可を得、十年正月から工事が始まった。息軒が帰郷した頃は工事の最中で、十月十二日に落成した。教授は父滄洲、助教が息軒で、その他句読師など十五人を擁する当時としてはかなり大きな学問所であった。これに「明教堂」と命名したのは息軒で、また息軒は、同堂創設を祝う詩を作った。¹³

明教堂落成

明時輝壁運。 下国奏龍功。
輪奐材皆美。 経営地又雄。
茅檐從聖制。 松栢任天工。
非是昇平觀。 兼伝太古風。
蘋蘩初舎菜。 蘭桂漸為叢。
多士邦基在。 長期道不窮。

塩谷宥陰に「記」を託すと、宥陰もこれに応じ、「明教堂記」を作って贈ってくれた。その一節を摘録する。¹⁴「仲平日州飫肥人也。

学昌平三禩而帰。頃新修其塾舎。命之以明教。而徵記於余。余在昌平。余仲平交最親。……接飫肥之友。猶如交昌平之朋者勿論也。果能以是率其之子弟。子弟莫不效焉。小之可以齊家庭。大之可以治天下国家。充之而可以与天地日星山川虫魚而並立焉。夫如是。則上之人必以学校為文具。不以儒術為小技方外。而将求之以行己立身之道。経世綏民之略。夫然後聖賢之教始明於世。而教之堂為不虛也。」尚、この「明教堂記」は、頼山陽の讃辞を得るところとなった。山陽曰く、「議論正大純粹。……立意構篇。並卓然可存也。」

清武に明教堂が創設され、かなりの規模で教育がなされたことも促されたのであろう、飫肥藩校の再興機運が高まり、天保二（一八三一）年三月、息軒三十三歳の時、「振徳堂」が落成した。振徳は『孟子』滕文公章句上から取ったものである。「放勳日勞之来之。匡之直之。輔之翼之。使自得之。又從而振徳之。聖人之憂民如此。而暇耕乎。」この堯帝の語については色々解釈があるようだが、息軒は『孟子定本』の中で以下のように解釈している。「先勞来之。然後正直之。輔翼其不及。事之序也。……終之以振徳。聖人安百姓之功成矣。」尚、「振徳」は、苦しんでいる民を救い賑わし恵み施す、という意味である。

振徳堂総裁兼教授に滄洲が、そして助教に息軒がなった。その他、高山信濃、杉田松窓、昌平塾の舎長を勤めたことのある落合双石¹⁵などが教職に当たる。その後、田中謙斎、平部嶠南、阿万鉄崖、小村兼山などが教職に当たった。このうち、平部嶠南は、明教堂時代からの息軒の弟子で、後に藩家老になり、息軒の教えを実践した人

物で、息軒の信任極めて篤かった。『日向私史』、『日向纂記』などの著書がある。振徳堂で教えることになったので、滄洲父子は、飢肥の加茂に移った。ほどなく、藩命を受け、九州各地の風教・政事の視察に出かけ、『観風抄』一卷を撰述し奉った。

天保四年、藩主祐相の侍読として、再び江戸に行き、外桜田邸の廨舎に住んだ。殿中の「左伝の会読」を主宰する傍ら、政務にも参与した。天保五年五月、藩主に従って帰国、従前通り、振徳堂の助教として、子弟の教育に当たった。

それから一年余後、天保六年七月、父の滄洲が死去、享年六十九歳だった。滄洲は天保の初め頃、中風を患い、飢肥に移住してから段々重くなり、同年の春過ぎ頃から容態が思わしくなくなり、七月に危篤状態に陥る。死の近いことを悟った滄洲は息軒を呼びこよう言った。「我年幾七帙、汝亦粗能承家学、死無所恨、但汝性剛直、非処叔世之道、謹戒之。」息軒が頭を下げて泣き伏しつつ聞いていると、側にいた人々の泣き声が急に大きくなったので、驚いて頭を上げると、父の命は既に尽きていた。この話は、息軒が父滄洲を偲んで元治元（一八六四）年に作った「太平山表」に出ている。これは、初め師の松崎慊堂に、次いで友人の藤森弘庵に依頼していたものであるが、慊堂が亡くなり天山も死んだので、息軒自身が書くことになったものである。

父の死後、外浦の新堤の件などで、とかく藩の権要と対立し疎まれるようになったので、鬱鬱と過す日が多くなった。そこで再び、藩に江戸留学を願い出て、天保七年、江戸へと出発した。途中京都

に三十日ほど滞在し、その間、考証学者として知られていた猪飼敬所に会った。敬所は息軒が松崎慊堂と共に最も心服した儒者である。名は彦博、字は希文、敬所は号である。はじめ心学を学んだが、二十歳を過ぎてから、儒学に志した。晩年は津藩の賓師になり、その地で没した。永井荷風の『下谷叢話』の主人公の一人であり、荷風の外祖父・鷺津毅堂は敬所最晩年の弟子であった。¹⁶敬所の著作、『管子補正』、『荀子補遺』、『論孟考文』などは有名で、中でも『管子補正』は今日も高く評価されていて、息軒の『管子纂詁』にも、多く引用されている。

江戸到着後は、しばらく千駄谷邸にいたが、同八年五月、再び昌平費に入寮した。しかし、以前とは打って変って、まともな人物はおらず、風紀も乱れていたの退寮、千駄谷邸に戻った。しかし古賀侗庵の重ねての要請で帰寮、すると斉長を命ぜられた。だが周囲が騒しくまた退寮、外桜田邸の上屋敷に住み藩の仕事をしていたが、大番所番頭になったため、またまた帰寮。しかし同年十一月頃、海野石窓の世話で、芝増上寺の金地院の一室を借りられ、そこで、思い切り読書に沈潜することができた。増上寺は蔵書が豊かなところで、かつて荻生徂徠もこの蔵書を借覧し勉学に励んだといわれている。海野石窓は後に佐倉藩の成徳書院で、息軒の同僚となる。名は予、通称は予介または予助、石窓は号である。松崎慊堂の門下で、林述斎が対馬で朝鮮信使と会見した時、石窓は慊堂の従者として同行。また、息軒や塩谷宕陰などと共に、慊堂の開成石経の刊行にも力を尽した。

天保九年、帰郷した息軒は、ついに江戸に移住することを決意した。

(二) 江戸で師友に交わる

天保九年六月十三日、安井息軒一家は江戸に向かって出発した。前日が暴風雨だったため一日遅れの出発であった。『東行日抄』の同日の条に次のようにある。¹⁷⁾「十三日。五鼓晴。姻親来別。使奴探酒溪。云。水落可渡。遂発。……此日最恋々不忍別。渡酒溪至向原。送者皆帰。独平部温脚・森生・養毛生・川添生及甥圭松送至吾平津。」二女の美保子は一年前に亡っていたので、江戸に向かったのは、息軒、佐代夫人、長女の須磨子、三女の登梅の四人であった。さすがに郷里の人々と別れるのはつらかったと見え、後に息軒は「出門」という詩を詠じている。

出門

満目悲妻孥。 離觴強自傾。

呼孥装急治。 不覺淚暗橫。(『睡余漫稿』¹⁸⁾)

しかし、息軒の江戸移住の決意は余程堅ったのであろう、出門以後、息軒は一度も日向に帰ることはなかった。これは、平部嶠南などの期待を裏切るものであった。嶠南は、「送安井先生赴江戸序」の中で、「予謂不十年、先生必帰、即欲不帰得乎。」と期待していたのだ。帰郷して、子弟の教育に、藩の政治にその高い学識を存分に用いてほしいと願っていたのだ。だが、息軒の生涯の願いは、どちらかといえば、学問研究の方に向っていた。「出門」に続けて、

以下のような詩を詠んでいる。

身如窮鳥脱攀籠。 詩思漸驅別恨空。

一瞥林頭先可喜。 霧山如削插秋穹。¹⁹⁾

息軒一家が江戸に着いたのは、その年の八月十日頃であった。十三日には早くも、日向の名産烟草を持って、松崎謙堂を羽沢山房に訪うている。『謙堂日曆』の同日のところに、「安井仲平は家を携へて東下し、本月十三日入府し、その君の青山荘に僑居す。来り調しその国の烟草を饋る、品上々。」²⁰⁾とある。

息軒の学問も漸く世間から認められるようになったので、私塾を開くことにし、麴町上二番町の某の廢舎を借りて移り、「三計塾」と命名した。「三計」なる名は、自ら撰じた「三計塾記」の冒頭、「三計者何。一日之計在朝。一年之計在春。一生之計在少壯之時也。何以名吾塾。慮諸生之晏起与春嬉也。」²¹⁾から来ている。

一階に、三疊、四疊半の小部屋が二、三あつて塾生はそこに住む、そして二階が、「班竹山房」であつて、講義が行われる。江戸に移ってくる時、郷里の思い出にと田野村字飯屋原から、虎班竹を一叢根こそぎに持ってきて、千駄谷邸の庭に植えた。一時は書齋を班竹山房と名づけたが、後に講義室の名にしたのであった。そこに「学規」が張り出されていたが、その一節にこうある。「人才の長短は君父も不能強候、各其長所を致成就、他日国之用に供候儀、学問之主意に候、聖人之道は広大無辺候、而至微不至之理を備へ、非一人所能尽候故、一家之説を致株守候義は不好事に候、然共、諸家之説、何れも聖經に依付し、導善道候条、新古之学風各任其所好候、

但会説議論之節は、和氣平心を宗として、至当之義を可被求候、偏見を主張し、他人之見を抑へ候は、学問之初に、先自ら非義に陥候……²²⁾」ここには、息軒の学問的立場が非常に明瞭に示されている。

では、三計塾においては、具体的にどのような教育がなされていたのだろうか。谷干城の『隈山詒謀録』から、同塾における教育の實際を窺ってみよう。谷が三計塾に在ったのは、安政六（一八五九）年十月から、文久元（一八六一）年九月までの約二年間であった。「先生の塾、塾頭を置かず。塾生の中、事に幹たる力あるもの四、五人を挙げ之を執事とす。相議して塾中の諸事を弁理せしむ。其の人を撰ぶや必ず学力に依らず。又新古に依らず。侪輩中に就き人物の秀でたる者を抜き之を命ずるを例とす。……会に表会、内会の別あり。表会は先生御出席にして、内会は塾生にて互に六、七人相詰めて論講を為す。表会の論講は、先生是非の判断を下す。故に議論少しと雖も内会に至りては、議論縦横、往々強いて異説を主張する者あり。……内会なるものは、生徒中同力のもの相会し、同意の書を攻究するものなれば、頗る有益なれば、専ら相互に討論會議するを奨励し、其の議論の決せざるもの、之を先生に質し、決を取れり。先生講義を聴くを不悦。聴いて而して黙々は尤も不悦処なり。故に生徒をして、互に自己の智力を戦はし、而て其の論の善悪、其の人物の智鈍を卜し、其の性に随ひ示唆する所あり。」²³⁾

このように息軒の教育方法は、各人の能力や性格に従い、それらを伸張・陶冶することに重点が置かれていた。それは、近代的な個性重視の教育といってもよいものだが、しかし本来の教育とはこう

いうものであろう。そのため、三計塾から、後に各界で活躍する多くの人材を輩出した。

息軒の門生で、後に活躍した人々を大別すると、①政治家・軍人、②学者・教育者、③裁判官、ということになるだろうか。いまそれぞれについて名前を挙げるならば、①には、谷干城の外、陸奥宗光、品川弥二郎、三浦安、河野敏鎌、神鞭知常、井田讓、明石元二郎、井上毅、大東義徹、石本新六などが、②には、川田剛、小中村清矩、山井清溪、亀谷省軒、昭井小作、安藤定、松本豊多、相馬永胤、渋谷牀山、星野恒などが、③には、三好退蔵、増戸武平、小野篤次郎、柳田真平、手塚賢太郎、中尾捨吉などが、いる。その他変わったところでは、長女須磨子と結婚した北有馬太郎や、幕末の志士として名の知られている雲井龍雄などがある。息軒の門生で注目されるのは、司法関係で活躍した者が多いことである。上の③に属する人はすべてそうだが、①の河野、神鞭、井上、大東なども司法省で活躍した人である。これは、古注学・考証学者でありながら、法や制度を重視した息軒の学問と極めて密接な関係があると思われる。

また、西村茂樹も息軒の弟子としてよく知られている。²⁴⁾しかし西村は、佐倉藩の藩校・成徳書院での息軒の弟子である。佐倉藩が天保十四年、海野石窓、海保漁村、そして息軒を招聘した時、西村はこの三人の教えを受けている。西村はこの中でも特に息軒の影響を最も強く受けた。西村が学問によって身を立てようと決意したのは、「昭宣公基経論」が息軒から称讃されたからといわれている。

西村はその後、蘭学や英学を学び、明治に入ると、福沢諭吉や中村敬宇などと共に「明六社」に参加し、啓蒙主義者として活躍する。だが西村は、最後まで儒学を捨てることなく、儒学と西洋哲学との統合を企て、『日本道德論』などの著作を残した。尚、海保漁村も安井息軒や海野石窓と同じく考証学者であったが、漁村の門下からも、鳩山和夫や洪沢栄一、島田篁村など後に活躍する逸材が出たことも注目されてよいだろう。

さて、三計塾での教育の他に、息軒の学問形成上に大きな役割を果たしたのは、息軒の発案によって創設された「文社」である。これは、息軒一家が江戸に移住してまもなく作られたものであるが、弘化以後ますます盛んになっていったといわれている。川田剛の撰した「安井息軒先生碑銘」（以下「碑銘」）に、「先生与塩谷芳野羽倉木下藤森諸儒結文社。剛以後進。濫廁其間。」というように、文社は息軒が、塩谷岩陰、芳野金陵、羽倉簡堂、木下鞞村、藤森弘庵などと始めたもので、後進の川田もそれに参加したとある。その他に文社に参加した人に、藤田東湖、林鶴梁、田口文蔵、重野成斎、平部嶮南などがいた。川田、重野、平部を除けば、何れも当時既に一流の学者と認められていた人物ばかりである。息軒はこれらの人々と交ることによって、切磋琢磨、自らの学問を広く深くそして堅固なものにしていったのである。息軒が作った社約の一節を録すと以下のようである。²⁸⁾

「難得者友。易失者時。人情所歎。自古而然。……我数人者之聚首於此都。不宜不早為之計也。況今天假我以歲月。優我以間散。所

在雖異。其業則同。則亦吾曹千載之一時矣。諺曰。臨戰作箭。諒其不及時也。請月一為會。會必以文。以從曾子輔仁之義。庶乎得免離群多過之歎。与文人詞客撫今慨昔之感也。」

また、細則のうち二・三を示すと次の通りである。

一、会之人。交無新故。唯其雅。去者不追。來者不拒。一任自然。然太寡則悶。太衆則喧。宜以六七名至十名為限。

一、会之題。主人必命二頁以上。以備後会結撰。文心之宣也。

一、会之文。分而評。人各一篇。人若少文多。徒宜分之。主人掌其政。

文会は持ち回りであったので、ここにいう主人とは、会場となつたところの住人のことである。

社約の「曾子輔仁之義」は、『論語』顔淵篇にある「曾子曰、君子以文会友、以友輔仁。」のところのことであろう。息軒はこのところは孔安国の解釈に従っている。即ち、「友以文徳合。有相切磋之道。所以輔成己之仁。」と。恐らく息軒は、この曾子の考えと全く同じ考えであったので、自ら進んで文会を立ち上げ、切磋琢磨して、学問の向上と仁徳の涵養に努めようとしたのであろう。そして息軒が文会から得たものは、極めて甚大であったといえよう。

しかし文会の参加者の中で、息軒が最も親しく交り、切磋琢磨して、自己の学問と人格の形成に与って力あったのは、木下鞞村と塩谷岩陰である。息軒は、「送木下士勤序」の冒頭でも、「予接於天下之士多矣、獲友二人、曰浜松塩谷毅侯、曰熊本木下士勤、自予之友是二人也、目日加明、耳日加聰²⁹⁾」、と書いている。木下鞞村、諱は

業広、字は子勤、初めの名は宇太郎、後に真太郎と改む。号に韓村の外、犀潭、澹翁などがある。韓村は、同郷出身の先生ということもあって、松崎懌堂にも親しく教えを受けた。息軒、韓村、宥陰の三人が、いかに親しく交り、切磋琢磨して鍛え合ったかは、上文に続く次の一節からも十分窺える。「每暇日相聚、談経論文、究其底蘊、醉焉則盤礴於一室、善謔互発、歌呼嗚嗚、自謂天下之樂、莫以加焉、既帰、家人輩必逆謂曰、君亦自塩木二子来耶、何其喜氣多也」と。また韓村も、文会を開いていた頃のことを回想して、「書息軒文巻後」の中で、こう言っている。「往者従息軒宥陰於文社之末。月次各抱一篇而言志。助以杯酌³⁰」と。

息軒、韓村、宥陰の三人が、切磋琢磨し相い励んでいた様子は、息軒の『読書余適』初稿、『韓村先生遺稿』、『韓村遺稿拾遺』などによって、ハッキリと見ることが出来る。それらには、一人の文章に対する他の二人の批評や頭注、傍書が付されていて、三人の切磋琢磨している姿が如実に窺える。更に付け加えれば、杉村武敏が編纂した『文章金箴』第二巻には、息軒と宥陰が批評を加えた韓村の文章が収録され、最後に息軒、宥陰の跋文が付されている。

『読書余適』は、天保十三年の夏、東北旅行をした時の紀行文である。出発日は七月二日、その時の気持ちをごう記している。「予生長西鄙。山水其素也。自移居於都五年。足跡未嘗出郊門。於未見之書。粗窺一斑。而湫隘之巷。目無寸碧。不能無龍鳥恋雲之想。」そして五十数日後、家に帰ってみると、佐代夫人が初めての男の子を産んでいた。「帰家。内人以十九日挙男。予今年四十四。始當是

慶。酌酒自賀。」そして詩も詠じた。その一つ、「聽了呱々只自憐。痴情早已算他年。春風従是一百度。莫傲乃翁聞鳥眠。」

こう書き了えて、息軒はこの草稿を、木下韓村と塩谷宥陰に見せ、批評を請うた。韓村と宥陰は真剣に読み、文字の誤り、文章の表現に修正を求め、また多くの箇処に評を加えた。息軒は、韓村、宥陰の批評のうち妥当と思われるのは受け入れ、草稿に朱を入れた。朱を入れた箇処はかなりの数に上る。これが、高橋智のいう初稿本『読書余適』である。⁴¹冒頭、即ち首のところにも朱が入っている。「次路迂也」のところを、韓村は、「以路便也」と直した方がよいのではと云っているが、息軒はそれを受け入れている。また、出発日の七月二日のところに炎天寺のことが出ているが、宥陰は、炎天寺の一条は刪つてはどうかと云っているが、息軒はその箇処の「土人云。僧名焔氣」の七字を朱抹している。こうした朱を入れたところが、上述のように、かなりの数であるため、『読書余適』の草稿と刊行本とは多くの箇処で違いが見られる。これも、息軒、韓村、宥陰、三名の切磋琢磨がもたらしたのであった。

また、注目されるのは、韓村、宥陰が加えている批評である。例えば、出発から三日目の七月四日、息軒は、「乃知物之所生。不若其所聚。管氏不予欺也。」と記しているが、宥陰はそのところに、「所見如所聞読書最適意処。読管子余適」と傍注している。周知のように、息軒は『管子』を好んでよく読み、自家薬籠中のものとしていた。自分のものとなっている読書が、旅行で如何なく発揮され確認されていて、まさに書名の「読書余適」に相応しい記述だ、と

讀えているのである。「読……余適」という表現は、他にも見られ、「読孟子余適」、「読六硯齋筆記余適」、「読六国史余適」、「読箒経余適」等とある。何れも、息軒の広くて深い学識と同時に、宥陰の鋭い眼光を示すものである。また韓村も、例えば七月二十七日の頭注で、「予謹告浮島之神。施鉄関石門於四方、勿使如安井仲平者、一步踏其地。踏焉、則眼徹水底、耳透山後、勘破一境神機、魑魅魍魎無所逞其靈怪。彼真懼也。」と批評している。これからだけでも、息軒の物を見る目がいかに透徹しているかに、韓村が畏れているかが知られる。

『読書余適』に付されている宥陰と韓村の跋文は三人が、おのこの知力を傾け、研鑽を積んでいっていたかを窺わしめるものである。宥陰曰く、「篇中、着議論及拾遺聞処、以覚措語欠紀行体。予初欲一筆勾之、作思此読書余適、不得以尋常游記文視之、作者固狡獪哉。」韓村曰く、「使虎捕鼠、曾不如百文之狸。息軒文成、而稿出。訂正誤字、其功在余、亦可享蜡之一饗。」

尚、息軒が東北旅行をするに際し、宥陰は、「送安井仲平東游序」という送別の文を書いている。同文章は比較的良好に知られたものだが、あらゆる困難に耐えて、学問に励む息軒の不屈の精神力に対する宥陰の畏敬の情がよく描かれている。「戊戌歲、遂辞官、挈家来就学於江戸。居無幾而逢火、資材蕩尽。未踰年、季女又病痘大。仲平自禄爵、離桑梓、孑然僑居乎三千里外。竈突未黔、累逢不慮之難、人倫之變。皆人所不能堪。而志氣不少撓、読書日必盈寸、作文年可以囊計。」息軒一家は天保九年八月、江戸に到着後、千駄谷邸

に住んでいたが、火災に遭い五番町に移った。その後も一家は居を転々とし、翌十年には、上二番町、次いで小川町に移り、十一年には牛込門外に移り住んだ。また文中の季女とは三女の登梅のことで、同十年五月八日、六歳で亡っている。そして宥陰は、最後に、息軒の東北旅行の路程と、息軒の志について記し、同文章を閉じている。「今茲季夏、仲平欲濟刀禰河、登日光山、還軼北総、遊于水府、觀名公賢佐之所経綸、然後入陸奥縦覽金華松洲之勝与衣川高館之陳蹟、壮其意氣、以益為進学之資。其驚人者、將滋不可測也。嗚呼、可畏也哉。」刀禰河は利根川、水府は水戸、金華は金華山、松洲は松島である。衣川は現在の岩手県胆沢郡衣川村、その近くに衣関があった。高館は、源義経が藤原泰衡に襲われ死んだところである。

このように、息軒は、短少でしかも醜陋ではあったが、その頭と体からは驚くべきエネルギーが湧出していて、回りの者を、懼伏・畏敬せしめないではおかなかった。そこで中村桜溪のように、息軒を蘭相如に比すものもある。そして、息軒の「題蘭相如奉璧函」を讀むと、息軒自身が自らを蘭相如に比していたと考えられなくもない。その前半に曰く、「眇然少丈夫耳。力不足以維鷄、貌不足以加人。而英氣所發。滿堂懼伏。以秦王之暴。不能少折其節³²。」と。桜溪は「跋息軒先生書牘」の中で次のように言っている。「先生為人矮短。其力与貌。皆不及常人。其字亦如其人。而経術之精。文辞之雄。議論之大。皆足以懼伏一世矣。嗟乎。相如之贊。殆先生自喻也。」³³

しかし、藺相如は政治家であつたが、息軒はあくまで学者であつた。勿論これは、息軒が政治に関心がなかつたとか、政治に全く関与しなかつたということではない。息軒の学問的立場は、古注学・考証学だつたけれども、息軒の儒学は、「経済」(「経世済民」)の重視をその内容とするものであつた。それだけに、息軒は現実社会の動向を無視することはできなかつた。求められれば、論策を書き、要路に提出もした。また、様々な文章の中で、現実社会を分析し、その対応策をも述べた。だが、幕末の動乱の影響は、息軒だけでなくその周辺にも及んだ。息軒の弟子たちの中からも、政治運動に加わる者も出てきた。また、欧米の学問や制度を学ぶため、欧米に派遣されたり、留学する者も出てきた。このように、息軒の周辺は、幕末から明治にかけて、目まぐるしく展開していくのであつた。

(三) 激動の時代を生き抜く

日本の対外政策をめくり国内が騒しくなつてきたのは、弘化二年に、米艦が浦賀に來航してからである。勿論、それより以前、清国と英国の間でアヘン戦争が起つていたので、日本でも漸く海防策などが論じられていた。塩谷宕陰は「阿芙蓉彙聞」を著して、日本が清国の轍を踏まないように警告し、また、「籌海私議」を作つて海防策を論じた。羽倉簡堂も、「海防秘策」を書き閣老阿部正弘に上陳している。しかし、嘉永六年六月、ペリーが黒船を率いて來航、通商を強要するにいたつて、国内はにわかに騒然とした状態となつ

てきた。藤森弘庵は直ちに「海防備論」を著わし、国防の強化を説いた。³⁴同年八月には、藤田東湖が弘庵を訪ね、攘夷詔勅問題について意見を交換している。そして二年後の安政二年末には、水戸斉昭の求めに応じて「芻言」を書き献策している。

息軒もまた、「海防私議」、「靖海問答」、「料夷問答」、「外寇問答」などを著した。何れも平易に書かれた小冊子だが、当時の人心に指南を与えたものである。

例えば「外寇問答」にはこうある。「此節外寇の沙汰に付て、士人を碎厉し、文武の芸に墮立、信賞必罰の法行はれなば、……浮薄偽巧の風を化して、忠厚節義の俗となすこと、……人情事勢の常なれば、令せずして行はれん。是国家数百年の氣運を延るの術にて、古人の転禍為福と云物なり。然れば天、洋夷を以て、御代長久の助けと為すとも言ふべし。封港之議は、善の善なる者と云は是也。³⁵」息軒は、攘夷を説くというより、この機をチャンスと捉え、国内の充実を計れ、と説くのである。その他、時局に関するものとしては、「上明山公書」、「西鈴要録序」、「題豊公裂冊圖」、「擬移諸侯飭戎備檄」などがある。最後の檄文には次のようにある。「我聞。兵者刑之大也。先王不以至治而廢刑。今豈容以無事而弛兵。況人忸三百之昇平。時際九六之厄運。……未雨葺屋。政之急務焉。……勿謂醜虜易与。蜂蟊猶能螫。勿謂陰險可恃。螻蟻亦自游。苟縱爾逸游。肆爾奢淫。戎備不飭。卒伍不練。卒爾禍發。色然敗竄。国有常刑。永殄爾類。爾其勿悔。……」³⁶

しかし息軒の国防論の根底には儒学の精神があつた。何時頃書か

れたものかは分からないが、「題洋煩図」の中で、息軒は、東洋聖人の戦争と現今西洋のそれとの違いを説いている。「戦逆徳也。聖人不得已而用之。故古者以火攻為下策。以其人物粉壘也。世益降。以戦争相雄長。於是乎火鎗之慘。輒近益講究其法。慘之又慘。乃有大煩。火攻之毒。至是最極矣。……」³⁷⁾

ところで息軒は、藤田東湖を介して水戸斉昭にしばしば意見書を奉った。勿論、東湖も文会の一員だったので、息軒と東湖とはよく会っていたわけだが、両者が初めて相見したのは天保十一年十二月十七日で、松崎謙堂の石経山房においてであった。『謙堂日曆』の同年同月日のところにはこう記されている。「藤田虎之助、名は彪、字は斌卿、水戸の近臣。林鉄藏と偕に來る。安井生、坐に在り。小酒を設けて同じく語る。斌卿は快人なり。初夜始めて散ず³⁸⁾。」それはともかく、ペリー来航後のこと、斉昭が東湖を介して、息軒に時局について下問した時、息軒は意見書を献じた。斉昭はそれにはなはだ敬服し、「足食足兵民信之矣」の八字を手書して息軒に贈った。周知のようにこの八字は、『論語』顔淵篇に出ている句で、子貢が政を孔子に問うた時、孔子が答えた言葉である。また、斉昭は、日頃息軒が、「今の兵威を強くせんと欲する者は、羊質にして虎皮を蒙るがごとし」と言っているのを善しとし、談笑の際にもそのことに言及したといわれ、斉昭がいかに息軒を高く評価していたかが分かる。「碑銘」に以下のようにある。「嘉永癸丑。米利堅求互市。諸侯各修辺備。先生謂。羊質蒙虎皮。其不取者幾希。……水戸烈公聞而善之。使其臣藤田彪就詢時務。且手書足食足兵民信之矣八字以

贈。他日与左右談兵。輒曰。無乃羊質而虎皮乎。」

さてこうした厳しい内憂外患の中で、文久二年七月、幕府から息軒に登城するようにとの命があり、將軍徳川家茂に謁を賜われることになった。当時の状況を某氏に報じた書簡に以下のようにある。

「残暑甚敷候へ共、愈々御安全大賀此事奉存候。然れば拙者、去月二十日、登城致候様被仰出候。即登城致候処、於躑躅間御老中松平豊前守様、若年寄侍座、御目付衆御付副にて左の通御達御座候。

学問宜致候趣、達御聴、御序之節、御目見被付候。

御案内通、老朽義は古学を宗とし、時風と背候故、御目見など之事は、夢にも不存候。誠に案外之次第候へ共、難有御請申上、退出致候。……」³⁹⁾

同年十二月十二日、息軒は、山形藩の塩谷宥陰、田中藩の芳野金陵と共に、幕府の御儒者となり昌平黌教授を命ぜられた。上の息軒の書簡からも窺われるように、朱子学者でなかった息軒が、昌平黌教授に任用されたことは、まさしく、「異数」(「碑銘」)の拔擢であった。同僚には、古賀謹堂、杉原心斎、中村敬宇、望月毅軒、永井信太郎、佐野令助、岡本信太郎などがいた。

ところで実は、息軒と宥陰の共通の友人・木下鞆村も、昌平黌教授に任用されるはずであったのだが、鞆村は病気を理由に、肥後に帰った。昌平黌で一緒に学問できると期待していた息軒と宥陰は、鞆村の辞退、帰郷を非道く悲しみ、共に「送木下士勤序」という文章を作った。宥陰はこう綴っている。⁴⁰⁾「士勤東肥人。祇役来江都。予自与之締交。十余禩干今。今則遭世子大故。将浩焉而帰。予烏得

不黯然而悲惘然而自失也。……嗚呼。離合時也。聚散教也。茫茫者天。使予瓠醪苞魚。忻焉迓士勤於品江之擲者。其復在何歲也哉。」そして息軒もその最後を次のように締め括っている。「往矣士勤、子能成其志与否、我将徵之他日書疏。」その後、息軒も宥陰も、韓村とは一度も会うことなく終つたが、書簡などのやり取りは行つていた。韓村の「書息軒文巻後」にこうある。「息軒書至。發函而獲此卷。喜極而心急。未詳書所言。遽取卷信手披之。……宥陰。亦寄近著一卷。以友誼見責。二子泰斗之望。其文章重於天下。豈其謂吾可取。亦求吾言貌於將失也。吾不敢辭。從而各謄写一通。置之几上。樂時往而參之。……」

しかし、息軒は慶応三年七月突然、木下士勤の死の報に接する。そしてその僅か一ヵ月後に塩谷宥陰も没した。息軒が撰した「木下子勤墓碑銘」に次のようにある。「慶応丁卯七月。忽子勤之訃。予大驚。……間一月。毅侯亦没。嗚呼二人者逝矣。而予孑然猶且托余喘於兩間。感痛如何。」

時代の激流は息軒の家庭にも及んできた。嘉永五年十一月、長女須磨子は田中鉄之助と結婚するが、やがて離婚、その後、安政三年、塩谷宥陰が仲人となって北有馬太郎と再婚した。北有馬太郎、別名を中村貞太郎、中村孟達などといった。北有馬は、肥前島原北有馬の生まれで、父に従つて、久留米や京都に移り住んだが、久留米では真木和泉守に教えを受け、京都では、勤王の志士・田中河内介などと交つた。北有馬が三計塾に入門したのは、弘化二年の正月で、僅か十六歳であった。息軒も「送中村孟達序」の中で、「自予

移居於江戸。筑人来游於門者数人。孟達最少⁽⁴⁾。」といっている。「送中村孟達序」は弘化四年頃の作といわれるが、同文を読む限り、息軒は北有馬の人物をはなはだ愛していたようである。「予愛其為人。而惜不能苦節以成其志。時痛折之。恂恂不敢違。或俛首垂泣。不敢置对。予益愛而重之。」北有馬太郎と須磨子は、結婚後、武蔵国入間郡奥富村で生活し、安政四年に糸子を、翌五年に小太郎を生んだ。

ところで、北有馬太郎は、以前から各地の勤王の志士たちと行動を共にしていたのだが、事態が風雲急を告げてきたため、息軒や須磨子などに累が及ぶことを恐れ、安政五年五月、離縁の形をとって国事に奔走したのだった。安政の大獄はどうかくぐり抜けたものの、文久元年五月、清河八郎の逃亡を手助けしたということで、幕吏に捕縛され、江戸伝馬町の獄舎に送られた。そのため、四歳の糸子と三歳の小太郎とは息軒に引取られ養育されることになった。北有馬太郎は、同年九月、病気のため獄中で短い生涯を閉じた。(北有馬の死については、元年六月説、二年説などがある。)

小太郎は後に、第一高等学校教授になり、よく祖業を受け継いだ。一高の時、小太郎から漢文を習った和辻哲郎は、その『自叙伝の試み』の中で、小太郎を「背後に実に深い学識⁽⁵⁾」を持った先生だったと回想している。

息軒の門下生の中で、幕末から明治にかけて、志士として最も名をなし悲劇の生涯を閉じたのは雲井龍雄である。雲井は、弘化元年三月に、米沢藩士、中嶋総右衛門の二男として同藩城下袋町に生ま

れている。幼名は猪吉、後、権六、あるいは熊蔵と称した。文久元年、十八歳の時出て同藩小島才助の養子となり、名を辰三郎と改めた。雲井が三計塾に入ったのは、慶応元年五月であった。息軒の門人録には、同年同月のところに、「米沢藩 小島熊蔵」とある。態度にやや傲慢さが見られたものの、息軒はその才と氣を愛して塾生の監督に当たらせた。息軒が同年秋、海嶽樓で有名な観月の宴を催した時の塾の執事長は既に雲井であった。その時息軒が作ったのが「海嶽樓観月有感」⁽⁴³⁾で、その最初と最後のところを摘示するところである。「武蔵原上草間月。自草間草間没。清風吹断原上草。而今鬱為金銀闕。……于嗟乎逝者如水不復還。秋去春來指顧間。旧業未成志未已。明月対酒幾回看。」（第三句は後に、「古風賦尽荒涼景」と更められた。）雲井もこれに次韻し、「奉次息軒夫子中秋海嶽樓觀月高礎」を作った。「芝海潮生浪孕月。浪吐浪吞月出沒。風意不妬雲四散。海白天碧朗天闕。……君不見虧者則盈逝者還。如纏如環是人間。試看今夜樓頭月。清光合似去年看。」

さて、雲井は三計塾に一年有余いた後、郷里米沢に戻らなければならなくなった。そこで別れに臨み息軒は、書齋に雲井を呼び入れ静かにこう言った。「子の挙動を觀るに決して碌々村莊の間に老ゆるものではない。蓋し子の胸裡には必ず絶大の志を懷くであらう。苟も男兒たるもの豈に斯の如きの志なくして可ならんや。只だ願ふ所は暴虎憑河の勇を慎み、区々たる小頓挫に因つて其の志を屈することなく、堅忍不拔以て志を達すべし。」と。雲井は息軒の高恩に謝し別れを告げ、出發に際し、「將辭三計塾賦以奉呈息軒先生梧下」

を作り息軒に贈った。その最初のところを録しておこう。「述而不作者。是豈仲尼之素意。栖々七十說不遇。白髮孤負經綸志。所以胸中之堯舜舜目。倩他毫素做尋常繪事。於戲乎六經。畢竟不祥字。……」ここで注目されるのは、「於戲乎六經。畢竟不祥字。」のところである。後にも、「果知六經不祥物。跌者伝之蹉者接。」と出ており、雲井の儒学が、陽明学に傾斜したものであることが看取できる。これは、陸象山の「六経我之注脚」に通ずる考えである。恐らくここに、雲井の志士としての行動を捉した思想的背景があったのであろう。

明治三年八月、雲井は朝憲紊乱の罪によって東京伝馬町の獄に投ぜられた。その時、雲井は秘かに書を息軒に贈った。その中に二詩あったが、その一はこうであった。

身世何飄飄 浮沈不自保
俯感仰又笑 心勞而形槁
微軀一致君 不能養我老
揮淚辭庭闈 檻車向遠道
鼎鑊豈徒甘 平生有懷抱
此骨縱可摧 此節安可撓
我命我自知 不復訴蒼昊

雲井は、斬罪梟首の判決を受け、明治三年十二月二十八日、牢屋敷で斬られ、小塚原に梟首された。

それより前、明治元年三月、官軍が江戸城攻撃に出るといいうので、息軒は難を避け、武蔵国足立郡領家村の豪農高橋善兵衛方に移

り、その住居を「息焉舎」と名づけた。そしてそこでの生活を詳しく記したものが、『北潜日抄』である。息軒はその頃の「感懐」を次のように詠じている。

昔期一世傑 今為羈旅翁

俛仰五十年 恍然与夢同

春光忽又熄 繞舎草芘芘

遺経聊自緝 閱古思窮通

天意本無定 有人即有功

世故粉如麻 掃蕩指顧中

明主知所務 何必徒忡忡

日暮砲声起 憑几嘯長風（『睡余漫稿』）

息軒が領家村から江戸に戻り、彦根侯代々木別邸に移ったのは、明治元年の十一月だった。

明治二年三月、明治新政府から仕官を勧められたが、病気を理由に辞退、専ら著述に努めることにした。息軒の「自述年譜」に、「是月弁官命シテ徴サル病ヲ以テ辞ス」とある。また、「安井息軒先生碑銘」に、「或有薦之於 朝者。以老耄辞。」とある。

息軒は明治元年から、同九年九月に死去するまで、即ち七〇歳から七八歳までの、僅か八・九年の間に実に膨大な著述を残した。それは正しく驚歎に値するものであった。『管子纂詁』（改訂版）、『左伝輯釈』、『論語集説』、『戦国策補正』（参訂）、『書説摘要』（再稿本）、『寢覚之友』、『北潜日抄』、『孟子定本』、『毛詩輯疏』、『弁妄』、和文の『睡余漫筆』などがその主なるものである。特に、前の三著

は、今日でも、日本だけでなく、中国においても高く評価されている。息軒の著述全体についての詳しい論述は次章に譲るが、息軒の著述が、その最晩年に集中していることは注意されてよいであろう。

明治時代に入ると、新政府の開国策によって、息軒の門下生たちの中でも、欧米に派遣されたり、留学するものが出てきた。⁴⁶

明治二年には、品川弥二郎が大山巖らと共に、普仏戦争の視察のため、欧州に派遣されている。その後、井上馨の斡旋で、留学に転じ、政治学や経済学などを学んだ。品川は萩藩出身で、初め松下村塾で吉田松陰の教を受けたが、松陰が安政の大獄で刑死したため、上京、息軒の三計塾に学んだ。欧州から帰国後は、内務少輔、農商務大輔、第一次松方正義内閣の内務大臣などを歴任した。また、独逸学協会（現在の独協学園）の創設に関わった。

明治三年には、飢肥振徳堂の弟子であり、また三計塾でも教えた小倉処平が学制取調のため欧州に派遣された。帰国後、小倉は、文部省翻訳係などを務めたが、明治十年の西南戦争で、西郷軍に加わり、銃創を受け自刃している。ところで小倉は当時の大学南校が閉鎖的であることに不満を持ち、より開かれたものにするため「貢進生制度」を確立させた。その第一期生に、小倉が振徳堂で教えた小村寿太郎も選ばれた。また、同期生の中に、三浦（鳩山）和夫や穂積陳重などと共に、三計塾で学んだことのある播州姫路出身の石本新六もいた。そして、小村も石本も後に留学する。小村は明治八年、第一回文部省留学生として、アメリカのハーバード大学に留学

し、同十一年同大学法律学科を卒業、同十三年に帰国している。石本は、明治十二年からフランスに留学、フォンテンブロー砲工学校を卒業、十五年に帰国している。後に小村は外務大臣、石本は陸軍大臣になった。

明治四年には、三好退蔵が秋月種樹の援助でロンドンに遊学している。三好は、高鍋藩出身で、藩校明倫堂に学んだ後上京し、安井息軒の門下生となった。また三好は、明治十五年には、憲法調査のため伊藤博文に随行して欧州に行っている。帰国後は、検事総長、大審院長などを務めた。

また、明治四年には、彦根藩出身の相馬永胤がアメリカに留学している。⁴⁶ 相馬は留学前に息軒に別れの挨拶に行った時の事を「懐旧記」に次のように書いている。「此出發前、今回ハ死別トモナルベキヤト考へ、暇乞ノ為メ旧師安井息軒先生ヲ尋ネタル所、先生ハ大ノ西洋嫌ナレバ、余カ断髪シ居ルコトヲ聞キ面会ヲ謝絶セラレタリ、然シ余ハ先生ハ既ニ高年ニ在ラセラルレハ、帰国ノ後再ビ拝顔ヲ得ルコト出来サルベク考へ、其真情ヲ述ベ強テ拜謁ヲ乞ヒタレバ、先生モ遂ニ許諾セラレ、面会セラレタルノミナラス、余カ為メニ送別ノ宴ヲ開カレタリ。」その送別の宴で、息軒は、雲井の詩の「生当雄凶蓋四海。死将芳名伝千祀。功業非遠有起群。豈足呼為真男子」を高吟したという。相馬は帰国後、専修大学を創設したり、横浜正金銀行頭取などを務めた。

明治五年には、土佐出身の河野敏謙と肥後出身の井上毅が、鶴田皓、沼間守一などと共に、欧州の司法制度研究のため、ヨーロッパ

に派遣された。井上らは、フランスでは、ボアソナードから憲法や刑法などの講義を聞いている。ボアソナードは、その後、日本政府から招かれ来日している。帰国後、河野は、法制局長官や司法大臣を、井上は、法制局長官や文部大臣などを歴任した。

明治七年末には、丹後宮津出身の神鞭知常がアメリカに派遣されている。また九年にも渡米、フィラデルフィア博覧会御用掛などを務めている。帰国後は、大蔵省主税局次長、法制局長官などを歴任した。

息軒死後に欧米に留学した門生としては、先に石本新六を挙げたが、ここではいま一人、渡辺昇に言及しておく。⁴⁷ 渡辺は、肥前大村藩出身で、幕末には坂本龍馬などと薩長連合に奔走した人物で、後に、大阪府知事、会計検査院長などを歴任している。渡辺は、明治二十年から二十一年にかけて、アメリカ、ドイツ、イタリア、フランスなどを回った。渡辺は、行中多くの詩を詠んでいるが、帰国直後に作った詩を掲げておこう。

胸間五十歳余塵 洗去笑吾豪氣新
寧与弁論千法律 不如磨礪一精神
伯林自有伯林月 墨水何無墨水春
乘醉大呼将覚破 滔々世上夢中人

明治八年七月、息軒は「錦山神社改建記」を作った。これは、熊本県知事の依頼によって作ったものだが、老疾をもって一度は辞退したものの、その誠意に嘉すべきものを認めて受諾したのである。同知事が土佐人だったので、あるいは谷干城の内意もあったかもしれ

れない。「錦山神祠改建記」は実に堂々たる大文章で、ここでは冒頭の一節を摘示しておく。「天地之間。至大至剛。物莫能屈之。經千歳而愈盛者。其唯忠正之氣乎。当其磅礴觸物也。山岳失其高。江海失其深。凡横目之民。神之靈之。畏之敬之。而莫知其所以然。猗歟盛歟。自天下力争。名将英士。世不乏人。而其能当是德者。漢有関羽。我有清正公。」

同年冬頃から、「思フ」言ハサランハ。腹フクル、業ナリ」と言つて『徒然草』を書いた兼好法師に倣つて、和文で『睡余漫筆』^④を書き始めた。「序」に執筆前後の情況が記されている。「己レ七十六歳ノ春ヨリ。目ヲ病ミテ。物ヲ見ル」叶ハス。起キテハ食ヒ。食ヒテハ臥ス」。二年ノ久キヲフレ共愈ス。ツレ／＼ノアマリ。日ヲ暮シカネテ。七十七歳ノ冬思ヒ立テ。字行ノ僅カニ見ユルヲタヨリトシテ。心ト手ニマカセ。思出ル事ヲヤタラニカク。日数積リテ紙カスモ重ナリケレハ。幼キウマ子トモノ心得ノ片ハシトモ成ル」有ラシカトテ。聚メテ一卷トナシ。睡余漫筆ト名付ヌ。」

「尚余命アラハ。年毎ニ書添ル」有シカシ」と「序」の最後に書いていた息軒であつたけれども、『睡余漫筆』を三巻書いた後は、急速に身体が衰え、病床につくことが多くなつた。死が直前に迫つたことを悟つた息軒は、「墓銘」を川田剛に依頼し、後事を谷干城と倉田幽谷に託した。息軒は、明治九年九月二十三日、その七十八歳の生涯を閉じた。

息軒死後の事については、谷と倉田の間にいささか行き違いがあつたようである。中村桜溪の「先師幽谷倉田先生行述」の中に以下

のような一節がある。^⑤「息翁已老。適孫尚幼。息翁視先生猶家人。嘱以後事。及疾病。谷隈山至。又嘱後事。息翁易贊。先生專釐喪事。隈山不悅。譏其所為。隈山起身雄藩。建功於中興之際。威望方熾。衆僉憚而阿之。先生曰。吾受先師治命。故奉周旋耳。隈山怫然抃袖而去。先生一意效誠無他。隈山後漸知而釈。」息軒は後事を倉田幽谷と谷干城に託したが、谷は自分一人に託されたと思つたのであろう。しかし、息軒は倉田にも後事を託していたことを、長女の須磨子が証言したので、谷も漸く納得したのだった。その後は、倉田も谷も、息軒から託された後事を怠り無く誠実によく処理遂行した。

明治十一年、川田剛撰「安井息軒先生碑銘」が出来る。その銘に曰く。

「世尚新奇。我独愛古。我猶守素。卓哉先生。不愧儒行。講礼治經。追跡馬鄭。先生存焉。師嚴道尊。先生亡矣。孰興斯文。」

注

- (1) F・A・ハイエク『自由の条件Ⅱ 自由と法』(新版『ハイエク全集』I期6、気賀健三・古賀勝次郎訳、春秋社、平成十九年)、一七七一―八頁。尚、馮友蘭については、最近その自伝が邦訳されている。『馮友蘭』(上・下)(吾妻重一訳、東洋文庫、平成十九年)参照。
- (2) 以下、安井息軒の生涯については、特記しない限り若山甲蔵『安井息軒先生』(蔵六書房、大正二年)、黒江一郎『安井息軒』(『日向文庫』8、日向文庫刊行会、昭和二十八年)、による。
- (3) 安井息軒「太平山表」(『息軒遺稿』所収、松村九兵衛他発行、明治十一年)。
- (4) 古屋昔陽については、拙稿「松崎樵堂・木下韓村・岡松堯谷」(『肥後

- の歴史と文化」、行人社、平成十九年）参照。
- (5) 安井滄洲「卯の花」(『安井滄洲紀行集』、安井息軒顕彰会、江南プリント社、昭和五十三年)、三七頁。
- (6) 谷干城『隈山詒謀録』(『谷干城遺稿』所収、靖献社、明治四十五年)。
- (7) 黒江一郎『安井息軒』、一〇四頁。
- (8) 安井息軒「清溪遺稿序」(『息軒遺稿』所収)。
- (9) 眞壁仁『徳川後期の学問と政治』(名古屋大学出版会、平成十九年)、二一九頁。
- (10) 安井息軒「送古賀元載序」(『息軒先生遺文集統編』所収、安井息軒顕彰会、弘文堂印刷、昭和三十一年)。
- (11) 塩谷宥陰「足軒記」(『宥陰騰稿』所収、松雲堂書店、昭和六年)。
- (12) 塩谷宥陰「送安井仲平東游序」(『宥陰存稿』所収、山城屋政吉発行、明治三年)。
- (13) 若山甲蔵『安井息軒先生』、一二頁。
- (14) 塩谷宥陰「明教堂記」、及びその山陽の評は、『宥陰騰稿』所収。
- (15) 森鷗外「北条霞亭」その六五、一三四に、落合双石の名前が出ている。その六五で、鷗外は、双石を「注目値する人物」として、「双石の『鴻爪詩集卷二』には霞亭の名が累見してゐて、中に二人の茶山と同じく賦した『秋柳』の七律がある。……」(『鷗外歴史文学集』第十巻、岩波書店)とあり、双石と滄洲、息軒との関係も知りたいが、別の機会を俟ちたい。
- (16) 永井荷風『下谷叢話』の第十五に以下のようにある。「猪飼敬所は当時博学洽識を以て東西の学者から畏敬せられてゐた老儒である。……毅堂が安濃津に赴いて敬所に謁しその門生となつた時、敬所は年既に八十四歳に達し耳目俱に殆ど官を失つてゐたので、当時贅を執つて従遊するものは毅堂の外には一人もなかつたといふ。」(『荷風全集』第十五巻所収、岩波書店、昭和三十八年)周知のように、毅堂の高弟・永井久一郎が荷風の父である。
- (17) 安井息軒「東行日抄」(『安井氏紀行集』所収、安井息軒先生顕彰会、協和印刷、昭和三十四年)。
- (18) 安井息軒『読書余適・睡余漫稿』(成章堂、明治三十三年)。
- (19) 若山甲蔵『安井息軒先生』、四七頁。尚「自述年譜」(町田三郎『江戸の漢学者たち』、研文出版、平成十年、一四七―一九頁)に、「籠島冲天ノ想アリ」とある。
- (20) 松崎謙堂『謙堂日曆』(『東洋文庫』所収、平凡社、昭和四十五―五十八年)。
- (21) 安井息軒「三計塾記」(『息軒遺稿』所収)。
- (22) 若山甲蔵『安井息軒先生』、五二頁。
- (23) 谷干城『隈山詒謀録』(『谷干城遺稿』所収)。
- (24) 西村茂樹については、拙著『近代日本の社会学者たち』(行人社、平成十三年)の第一章(二)西村茂樹、参照。
- (27) 川田剛「安井息軒先生碑銘」(『息軒先生遺文集統編』所収)。
- (28) 若山甲蔵『安井息軒先生』、七六―七七頁。
- (29) 安井息軒「送木下士勤序」(『息軒遺稿』所収)。
- (30) 木下樺村「書息軒文巻後」(『樺村遺稿拾遺』所収、発行者木下重三、大正五年)。
- (31) 高橋智「塩谷宥陰・木下犀譚批評安井息軒初稿『読書余適』」(『斯道文庫論集』第三十三輯、平成十年)参照。
- (32) 安井息軒「題蘭相如奉璧図」(『息軒遺稿』所収)。
- (33) 中村桜溪「跋息軒先生書牘」(『桜溪文鈔』所収、圓谷印刷、昭和二年)。
- (34) 永井荷風の『下谷叢話』には、藤森弘庵の死去前後のことが、かなり詳しく書かれている。第二十二、二十七、二十八、三十一など参照。
- (35) 若山甲蔵『安井息軒先生』、一一―一三頁。
- (36) 安井息軒「擬移諸侯飭戎備檄」(『息軒遺稿』所収)。
- (37) 安井息軒「題洋煩図」(『息軒先生遺文集統編』所収)。
- (38) 松崎謙堂『謙堂日曆』(6)、五一頁。
- (39) 若山甲蔵『安井息軒先生』、一六三―一四頁。
- (40) 塩谷宥陰「送木下士勤序」(『宥陰存稿』所収)。
- (41) 安井息軒「送中村孟達序」(『息軒先生遺文集』所収、安井息軒顕彰会、宮崎印刷、昭和二十九年)。
- (42) 和辻哲郎「自叙伝の試み」(『和辻哲郎全集』第十八巻所収、岩波書店、四二―四四頁)。
- (43) 安井息軒『睡余漫稿』所収。

- (44) 以下、高橋力『註解志士雲井龍雄詩集』（雲井龍雄宣揚会、昭和十四年）参照。
- (45) 石附実『近代日本の海外留学史』（中公文庫、880）、一八八頁など参照。
- (46) 『相馬永胤伝』（専修大学出版局、昭和五十七年）、三八―九頁。
- (47) 川口久雄編『幕末・明治海外体験詩集』（大東文化大学東洋研究所、昭和五十九年）、五二七―六二二頁。
- (48) 安井息軒「錦山神祠改建記」（『息軒遺稿』所収）。
- (49) 安井息軒「睡余漫筆」（和文）（『日本儒林叢書』第二卷所収、鳳出版）。
- (50) 中村椽溪「先師幽谷倉田先生行述」（『椽溪文鈔』所収）。